

第二節 長崎鑒学校の県移管

明治八年四月、長崎病院が蕃地事務支局から長崎県に移管された後、院長吉田健康の尽力によって医学再興の運動が結実し、明治九年六月二十日、長崎病院内に医学場の開設をみたのであったが、この医学場は特に政府の保護のもとに県内各区生徒二名を撰挙せしめ、自費生の

めるべき必要を生じ、且つ県立と定めて地方税によって支弁されねばならぬ状態に陥った。そこで明治十二年一月十六日、学務課ではこの問題と審議し、甲第十一号を以て布達を発することを決し、同月二十日に至り、次の布令を発した。

甲第拾六号

長崎鑒学校之義当一月以後県立ト相定候条此度布達候事

年月日

長官御名

鑒学校と改称され、規則も整えられていたのであるが、維持費は各区の課出するところで、校長以下、各職員は旧例によって病院より兼摂していた。そして県庶務課の所屬として、県立鑒学校に準じた取扱いを受けていた。同年十一月八日、郡区制の改正によって各区撰挙生の制度が廃され、同年十二月十七日、庶務課より学務課に移管された。ところが、長崎鑒学校の経営費は復興以来、定額なく、院費の各区課出によって病院に寄生するものであった。そこで各区撰挙生制度廃止に伴って定額を定

これは県令内海忠勝名義で、一月二十日付として達せられ、病院等を鑒学校の附屬に代用し、生徒の実習所に充てたのである。

一月二十一日、長崎県令内海忠勝は乙第三十号を以て、長崎病院を除いた公立病院設立伺式を定め、郡区宛に通達し、公立病院の整備を計った。

一月二十七日、長崎鑒学校は学務課に宛て、物理学卒

第二節 長崎醫学校の県移管

業試験を翌二十八日午後一時より三時まで施行するので、これまで、この種の試験を施行する際は時々衛生掛の臨席もあつたが、今度も同様臨席されるかを問合せた。

さて、明治五年十二月一日、大村益次郎等の尽力によつて、公布された徴兵令は漸次全国各地に徹底化され、

明治十一年三月二十八日の島原、大村、五島、諫早方面の各区々戸長会議の際には議題に上つたりしたことを記して置いたが、その後、長崎にも長崎徴兵署が設立され、傭医師として大園謙斎が勤務していた。この徴兵署は、更に各学校の生徒徴兵に関する事務も取扱つていたが、

兵役免除は長崎醫学校にも適用されていた。処が医学学校生徒の兵役免除に関する三重県の文部省に対する伺書に端を発し、公立医学校生徒の徴兵免役の件が明治十二年二月十二日に至つて醫学校を管轄する学務課でも考慮され、従来、同校を管轄していた庶務課に対して疑義を問合せた。その返書は三重県の例に従い、公立醫学校の徴兵免役は廃止されるべきである旨を示し、翌十三日に学務課へ達せられ、これについて、学務課では十四日に長

崎醫学校にこの間の事情を学三三〇号を以て報告するところがあつた。次に關係資料を示して置こう。

醫学校生徒徴兵免役之儀ニ付庶務課へ照会按

長崎醫学校生徒ノ儀ハ学級ノ進歩ニ依リ徴兵免役可相成旨先般御課ヨリ当課へ管掌替之砌伝承有之候処本年文部省日誌第十九号中公立醫学校生徒徴兵免役之儀三重県伺書面へ同省指令文意ニ付テ殆疑惑ヲ生シ候条有伝承之通果シテ相違無之候ハ、其証跡至急御確報有之候様致度此段及御照会候也

明治十二年二月十二日

学務課

庶務課 御中

庶ノ第六十四号

長崎醫学校生徒之義免役ニ可致見込ヲ以一昨年校則文部省へ及御届候処其後判然不致廉有之近來其筋へ相伺候得共則三重県指令之通未タ比較法未定ニ付今日迄ハ免役不相成候条此段及御答候也

明治十二年二月十三日

庶務課

長崎県
庶務課

学務課 御中

長崎醫学校生徒徴兵免役之儀ニ付別紙甲号之通庶務課へ照会候処即チ乙号之通回答有之就テハ同校生徒等向來ニ

於テ其目途自然可相關係重事件ニ候条左按ノ通本課ヨリ
同校へ通達可致哉相伺候也

学三三〇号

其校生徒之内徴兵適齡ノ者タリテ学力ノ進歩ニ随ヒ免役ニ可
致見込ヲ以其筋へ稟議次第モ有之候処文部省専門修業生徒ト
相当ノ比較法未定ニ付即今免役不相成旨ニ候条為御心得此段
申入候也

明治十二年二月 日

長崎県 学務課

長崎醫学校 御中

二月二十四日、医師試験規則が制定されたが、この頃、
長崎醫学校を再び長崎医学場と改称することが達せられ
ていた。

二月二十六日に至り、長崎醫学校を長崎医学場と改称
することが取消された。これは回第三十八号、庶務課、
学務課より内海忠勝に宛てた達に示されている。

今般長崎醫学校ヲ長崎医学場ト改称云々相達置候処右達取消
候条此旨相達候事

明治十二年二月廿六日

内海 県令

長崎県
令内海
忠勝

第五章 長崎醫学校

明治十一年十二月十一日、庶¹⁴⁵⁷号によって牛疫診断係
医員が撰挙された。

明治十二年（一八七九年）一月二十五日、長崎県では牛
疫診断係医員が各郡長から撰挙上申された。そのうち、
三根、養父、基肆郡長朝長東九郎の上申書には長崎醫學
校關係者はいないが、二月十二日の東松浦郡長古川龍張
の同様具状によれば、長崎醫学校關係者が数名いる。呼
子村の藤松平（三十三才）は慶応元年正月より十二月ま
で長崎で上瀧寿安に従い、内科修業、翌年正月より、三
ヶ年間、長崎の富津漸庵に従い、内科修業、明治四年二
月より五年十二月まで長崎病院において内科を修業した。
東松浦郡切木村一九〇番地土族渡辺文亮（三十三年八
月、禄高七石八斗四升九合）の履歴書によると、

一 元治元甲子年二月ヨリ筑前国多久立節ニ從ヒ明治三庚午
年十一月迄六ヶ年十一月間漢法医学内外科修業

一 明治四辛未年二月ヨリ長崎病院ニ於テ「レウエン」氏に
從ヒ明治五壬申年十一月迄一ヶ年十ヶ月間西洋医学修業
と見え、以後、唐津で漢法医を開業し、明治九年、切木

第二節 長崎醫学校の鼎移管

村に移り、その後、唐津病院で薬局に勤めた。

明治十二年三月十一日、鹿兒島自然は大園謙斎の後任として長崎徴兵署備医を申付けられた。(「明治十二年、教員医員学区取締辞令原書」)

三月七日、吉田健康、長崎病院治療係田口秋桂が明治十年来、五島分派病院に在勤、過日、帰院したが、五島分派病院創立以来大いに勉励した結果、その効少からぬところがあり、治療係として着任した。治療係は昨年増給になっているので、同人も増給して貰いたいと内海県令宛てに上申した。そこで明治十二年三月十一日、増給五円が実現した。(「明治十二年教員医員学区取締辞令原書」)

さて、二月、達により本校の費額を定め、一月より六月まで地方税を以て金二千元を支出することとなった。

三月十二日、吉田健康は内海県令に上申書を呈出した。本院治療係長屋恭平が協立五島病院に赴くので、薬局係山川饒を治療係補兼務に仰付けているというのである。

この山川饒の件は、田口秋桂の帰院によって見合せとなった。(「明治十二年教員医員学区取締辞令原書」)

四月五日調査の長崎醫学校生徒一覽表、校員一覽表などがあるので次に示そう。(「明治十九年十二月調、本県下教育沿革史、長崎県第二部学務課」)

当校生徒一覽表

在舎生	六拾一名
通学生	百拾四名

内 訳

一級生	四拾五名
二級生	四拾六名
三級生	拾七名
四級生	拾九名
級外生	三拾七名
右總計	百六拾五名

右者明治十二年第四月五日調、

長崎医学校書器目概表

品 目	概 数
書 籍	百零七部
図 画	拾式幅
学 具	三百五拾二箇

当校校員一覽表

校 長	吉 田 健 康
-----	---------

第五章 長崎鑒学校

教員	教員	生徒取	生徒取	生徒取	用度係	右總計
----	----	-----	-----	-----	-----	-----

生徒取締
生徒取締
生徒取締
用度係

岩 久 川 大 山 国
 永 松 端 賀 脇 富
 平 次 経 碌 泰 仙
 造 郎 恵 郎 介 太 郎

右者明治十二年第四月五日調査